

路地歩き②

路地を歩いていると興味ある看板が目に入った。「茶馬王故居記念館」とある。

どうやらこの辺を取り仕切った馬鍋頭の住居が記念館になっているらしい。石壁に囲まれているので表通りから中は見えないが立派な屋敷である。入り口は路地の奥にある。



記念館とあるから屋敷中の見学も出来るのだろうが、門から入ったところで中庭を見るだけにした。

植え込みや鉢植えの置かれた庭の周囲に二階建て木造の居室が囲んでいる。

外壁の大きさから推して、この左右や奥に大きな庭や建物がある様に思われた。

大きな通りや表通りに在るのは商店か食べ物屋で住宅は壁に囲まれていて路地を入った所に入り口の門がある構造になっている。居住の状況を見るにはどうしても路地を往復しなければならないし、門が閉ざされていれば、中の状況はまったく見えない。





街の中の看板は少ない。あっても地味なものだが、その中でこの看板が目に入った。下の文字が「東巴原味」とある。トンパの郷土料理と解釈した。上の文字は料理屋の名称だろう。路地といい、構えの風情といい、入って食べてみたいところだ。



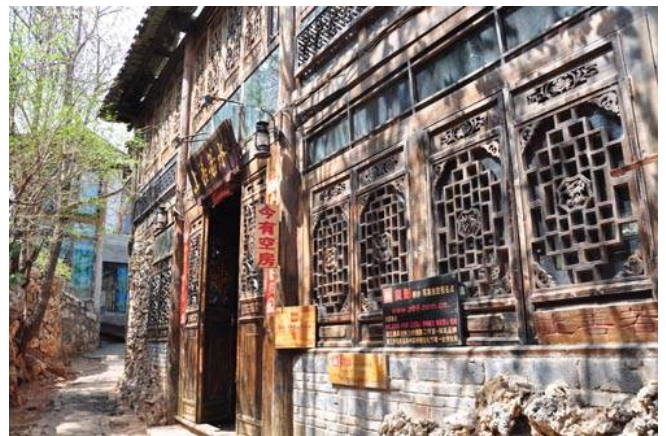
路地には右に左に曲がり角があつてとても半日の観光では見切れない。殆どが屋敷の壁を見ることになるが、面白そうな路を見つけては迷子にならない様に気を付けながら進むことになる。表通りと違って人が通ることはない。右の写真はまだ入り口付近で左側にカフェの看板があった。

ながら進むことになる。表通りと違って人が通ることはない。右の写真はまだ入り口付近で左側にカフェの看板があった。

幾つかの客棧（宿屋）



茶馬王故居の路地をさらに奥まで行った所に古い木造の建屋がある。剥き出しの木棧で趣がある。塗装されていないのが珍しい。



遠くから見た時にわからなかったが入り口に「今有空房」と書かれた看板が下げられていた。客棧である。古い。或は昔の茶馬隊が宿泊したのはこんなところかもしれない。

中を覗いてみると居心地も良さそうだ。次に訪れる機会があれば是非泊ってみたい民宿である。





左は路地にあった「藍石客棧」、右が郊外にあった「五味客棧」の入り口になっている。赤い提燈が下がっている場所が正面入り口だ。麗江の古街区にも客棧はあるが、こちらの方が規模小さく、いかにも民宿の感じがする。ガイドの話では、どうやら都会の若者たちは東河に泊まって田園の風景を満喫することが流行しているらしい。

村はずれの景色

青龍川の上流に向かってさらに進んで行くと道幅が狭くなり、石畳も不揃いで手入れが行き届いていない。



それを越すと村のはずれになった。「石蓮古寺」と額が掲げられた、おそらくチベット寺院と思われる建物があり、その向うに民家



が点在し、その先は山になっている。

丁度、石積をして水路を修理している現場に遭遇した。セメントの混練機もある。石の間の隙間をモルタルで仕上げている。写真の右に青龍川が流れている。修理が終わればここに水を引き込むのだろう。

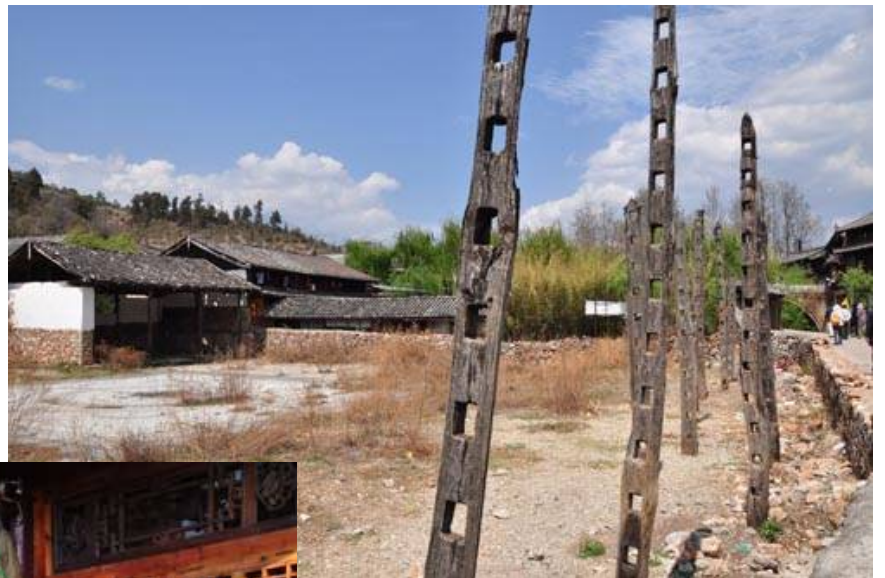
周辺の路地を少し回ってみたがもうかなり集合場所から離れている。歩き疲れてもいるので先に行くのを諦めてここから戻ることにした。



中国の雲南省や四川省を旅していると右の写真の様な穴が開けられた木の柱が立っている光景を良く見掛ける。

これに棒を通して農作物を干している。トウモロコシの黄色い実が並んで掛けてある姿は農村の風物詩でもある。

藍染めした長い布を掛けて乾している光景を見たこともあった。ある意味で農村のシンボルとも言える。



左の写真は麗江で撮ったレストランだが、手すりにこの農村のシンボルである「穴あき柱」が使われていた。

注意して見ると観光客相手の店にこの農村の意匠を良く見掛ける。